

“満州郷土玩具（旧満州經由で
収集された作品）”の問題点
— 「伊藤三郎・中国民間玩具
コレクション」について—

伊藤三郎*

1. 本コレクションの概要と特色

中国の人形玩具は美術人形、民間玩具、古代玩具に大別されるが、本コレクションは日本の「郷土玩具」に相当する中国民間玩具を、筆者が1980～90年に、中国農村を回って採取、或いは中国の友人の寄贈を受けて出来上がったものである。総数約850点で、殆んどが文化大革命（1966～76年）以後の民間美術復興運動で再現された「現代物」である。尚数量的に小ぶりになったのは、筆者が定年後、北京中央民族大学と貴州大学に留学、これからという矢先、目を患い、視覚障害2級になり、採集を断念せざるを得なかったからである。故に「教育（益知）玩具」等、後刻まとめて購入予定の物は少数に止まった。

本コレクションの内容を一言で表現すれば、1994年に東京で開催された「中国民間玩具の世界展」（中国美術館所蔵）とよく似ていた、であろうか。

その玩具及び玩具資料は、目録とカードで一覧でき、目録からは、各種の分類ができる。中国の分類法は用途別分類（例：節句毎に出回る「節令玩具」等）と製法別分類が多いようだ。

この目録とカード（全作品のカラー写真と品名、産地名、寸法、解説等が付いている）は、CD盤に収められ、利用できるようになっていく。

本コレクションの纏めには、主に図鑑「中国民間美術全集十三、遊芸篇・玩具巻（1984年）」を参照した。この書が民間美術復興運動を総括

したものだったからである。

本コレクションは兵庫県姫路市の「日本玩具博物館（井上重義館長）」に寄贈される。多くの方の参観とご利用を期待する。

本コレクションはまた次の二特色を持つ。

〈i〉中国全土の人形玩具をできるだけ満遍なく採集するよう努力した。

この方針は戦前の民間玩具採集が、「子授け人形（泥娃娃）等迷信的なものに偏っていたのではないか、という思いからきている。戦前のコレクションは採集を在「満」邦人に任せ、つまり「かたち」を鑑賞するだけで、玩具で「あそび」、生活する人達を見なかった。では在「満」の採集者とはといえば、その解説を見るかぎり、郷土玩具に対する親近感はあるものの、植民地支配者特有の露骨な「蔑視観」で中国文化を見ている（少数だが、そうでない人もいたが・・・）。

中国の研究者によると、中国美術とは二重構造になっている。それは①宮廷プラス士大夫層が磨き上げた美術（故宮博物院の国宝等）と②農民が育てあげた民間美術の二重構造である。両者は相互に影響し合っているが、文化創造の基本的力は②にあるという。民間玩具は②の一部で、迷信等の封建遺制の残りカスも混っている。新中国の文化方針は、農民の民間美術を長期間かけて、除去すべきは除き、後世に伝える方針で、民間美術等を収集、村々の「群衆文化館」等に保管していた。紅衛兵は民間美術と関係者を敵視して破壊、迫害したので、民間美術はその大部分が消滅した。それを農民の副業で再現させたのが民間美術復興運動であった。日本の郷土玩具復興運動は、明治の先覚者によってなされたが、中国では市場経済移行の前段として、国を挙げておこなわれた。

〈ii〉生産地等の玩具資料が明確

日本の郷土玩具の場合、有形民俗資料になる

* 日本人形玩具学会会員

ためには、定められた要件を満たしていなければならない。産地等が不明確な物は、学術的価値が低い。中国民間玩具も同様である。

本コレクションは筆者が中国美術学会民間工芸美術委員会（民間美術学会と略称）と協力、産地、名称等に正確を期した。加えて、前記図鑑の編集委員でもある徐芸乙南京大学教授に監修をお願いして、万全を期した。従って後学の研究に役立つと信じる。

中国民間玩具産地について述べれば、産地形成には条件があり、第一は地力に乏しい土地である。華北に産地が集中するのは、黄土地帯で、肥料や灌漑の乏しかった時代、農民は数年おきに一毛作の休耕を余儀なくされ、副業を必要とした。第二は文化水準が高く、交通も便利、販売組織（同郷〈パン〉幫が多い）が強固等である。また、伝統的節句行事を、長い歴史をかけて、全国一律におこなってきたことが、漢民族の連帯意識強化と共に、農民の副業をも助けている。従って産地は一朝にしてはできないのである。

後述するように、華北の玩具生産地と旧満州の消費地を結ぶルートは、日中戦争中も封鎖されていなかった。旧満州は、日中全面戦争、太平洋戦争の重要な後方基地であったので、重工業化が急がれ、戦乱を逃がれる華北、山東の農民が労務者として大量に旧満州に移送された。漢民族の行くところ、節句行事はつきもので、民間玩具も共に入境したのである。

2. 収集の動機と目的

筆者は「文化大革命」に触発され、また今後の日中関係を展望して、新角度からの研究、中国民俗学研究を志した。しかし毛沢東は民俗学を嫌い、戦前の中国人研究者は台湾と米国に追われていた。タテ社会の中国で、就くべき師もない—外国人がどうやって中国民俗学を研究すればよいか？そこで有形民俗資料である民間玩具を収集、併せて祭祀調査を始めることにした。高名な民間玩具研究者李寸松先生達も文化大革

命で苦労しただろうと、安否を問い合わせると、「吊るし上げは喰ったが元気。84年を目途に、民間美術復興運動を始めるところだ。日本の文化財保護についても知りたい。」との返事。“渡りに船！”と筆者の希望を伝えて快諾を得た。以後度々訪中、民間美術学会の年次総会にも数多く出席、筆者の研究も発表、各地の研究者と交流して貴重な玩具の寄贈も得た。また該学会と日本人形玩具学会との学術交流及び江蘇省美術館への日本郷土玩具の寄贈（亀井鑛コレクション）の橋渡しもおこなった。筆者の各地での祭祀調査と採集品の紹介、民俗志及び論文は日中友好新聞や各学会誌に報告した。

さて、中国は2002年を機に、内陸部も含めた全面的「市場経済」時代に突入、農村にも資本主義が流入して、副業としての民間玩具の製作、技術の伝承も影をひそめる。思えば、筆者は歴史のほんの一瞬の僥倖の時に、貴重な民間玩具を日本に残すことができたのである。その価値を知って、永年の語学の友でパソコンにも強い中村ひろ子さんが、写真家の友と障害者支援に来て下さった。家族の協力もあり、長年困っていた玩具整理が軌道に乗った。

3. 「現代物」と民俗学の接点

本コレクションは「現代物」にならざるを得なかったが、それ故の利点もある。「現代物」には民間美術復興運動の成果として、今まで知られなかった新種が多数出現したからである。それらを祭祀調査の内容とつき合わせると、中国民俗学の重要テーマが浮んでくる。

以下三種の「現代物」について見てみよう。

〈1〉端午の虎の「合体形」

新中国後に華北各省で発見された端午の虎（縫いぐるみ）の、他の動物との「合体形」である。鼻の部分が鋭い槍のような蛇と化した「蛇鼻虎（山西）」、また童子と合体した「人体連虎（陝西）」等である。旧暦五月五日は中国では、猛暑からくる悪疫から子どもを護る日で

あった。悪疫退治の神、張道陵の乗る「神虎」にちなんだ虎の玩具が飾られ、男の子に与えられる。「合体形」は虎の外敵（悪疫）退散の威力増強のためと考えられる。「合体形」を発想する原因として、悪疫や災難は外から侵入してくる敵と見る思想がある。一神教の「原罪」のような内在的なものとは考えないのである。外敵は即ち「鬼（古代語は儼）」で日本に伝来して「追儼（鬼やらい）」になった。外敵だから威嚇や祓い清めて退治できると考え、お祓いをする人「巫」が登場する。「巫」は古代、「儒」と同義で、「小儒」は葬儀など死者に関すること全てを扱う集団であった。孔子もそういう出自である。小儒の中には人形を使って墓所のお祓いをする者もいたが、前漢時代には宴席に出て、人形を舞わせる芸人になる者もいた（漢代画像磚にある）。



「蛇鼻虎」山西省（布）
端午の虎と蛇の合体物

〈2〉「黒い玩具」と民俗学

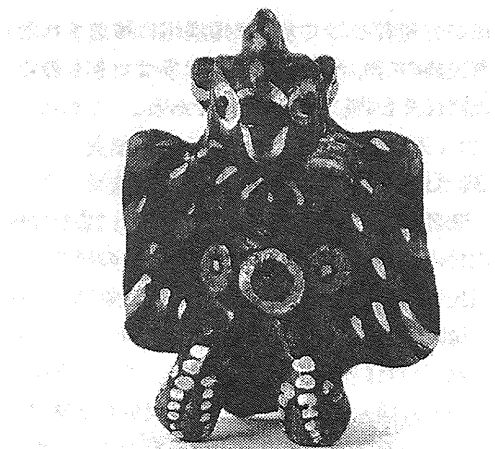
「黒い玩具」は数種あるが、主要なのは次の三種で、全て黒い地に目鼻や文様を彩色した土笛である。

①「泥泥狗」と総称される玩具・・・河南省淮陽県の伏羲陵の祭で売られ、彼の妻、女媧の生物創造神話と結合した多数の怪獣、人、動物等がある。

②「泥咕咕」と総称・・・河南省浚県大伾廟の



黒い玩具「人面坐り猿」
河南省淮陽県（土笛）



黒い玩具 苗族玩具「山鷹」（土笛）
貴州省黄平県

縁日で売られる黒い玩具。隋末農民戦争の死者の副葬品と関係あるものとされ、黒い騎馬武者や馬の人形が多い。また「クークー」は鳥の鳴き声の擬音で、鳥の玩具も目立つが、神話から古代氏族のトーテムと関係ありとする研究者もいる。

③貴州省黄平県の「苗族玩具」

西南少数民族は古代の氏族制社会時代の風習を残す所が多い。古代、漢民族の全国制覇に追われ、人跡稀な所にコロニーを開いた。土家族や彝族には、現在も巫術師が活動している。彼

等は弟子達と仮面劇をおこなう。施療が終わった家や村の広場等で、巫術師が天神や海神の援助を得て、如何に鬼を退治したかというストーリーや予祝行事的仮面劇を上演する。筆者は貴州、雲南両省境に近い威寧少数民族自治県の山奥で、少数民族イ（彝）族の祭と仮面劇「撮泰吉」を調査した。村の長老が巫術師を兼ね、ピーモに率いられた猿面をかぶった男達が祭祀を行い、その後、予祝行事のような仮面劇を村人に見せた。

〈3〉「棒棒人」と「耳報神」

棒棒人は挽き物玩具で、日本の「こけし」そっくりの、手足の無い人形である。こけしと異なる箇所は、頭のてっぺんに溝を掘って木製の飾りをはめ込む所だけである。同形の人形を北方シベリアのシャーマンが頭痛の病人を治療する時用いている。また男女の区別が形に現われている。男性（高棒棒人）は「こけし」に、女性（低棒棒人）は「えずこ」に似ている。山東省郊（タン）城が棒棒人の産地であるが、同形で小型化した人形が、河南・浚県にもあるし、山東・泰山でも売られている。

新中国以前には、関東（河南—山東）は、「耳報神」と呼ばれる棒棒人を持った巫術師が村々を巡り、占トヤや治療に当たったりしたという。その時、巫術師が人形を耳に当てて神の託宣を聞く姿勢をとったので、「耳報神」と呼ばれた。現在「耳報神」に一番近い形状の物は、泰山の棒棒人だといわれる。

以上の民間玩具とそれを売り出す祭の調査から浮かんでくる民俗学の課題の一つは「中国巫術」ではなかろうか。中国巫術は朝鮮巫術、日本神道、シベリアのシャーマニズムとも深く関わっている。またこれらの地に、それぞれ棒状の人形が存在し、魔除け等に使われていることに注意すべきだろう。



黒い玩具「騎馬武者」
河南省浚県（土笛）



少数民族彝族の仮面劇「撮泰吉」
猿の仮面をかぶり、赤ん坊を背負う扮装。



「高棒棒人（男・右）」と
「低棒棒人（女・左）」（木）

4. 日本に残った「満州郷土玩具」の問題

昭和初期、民間玩具の「伝世品（新中国以前に作られた物）」が、“満州郷土玩具”の名で、大連経由で日本の郷土玩具愛好家に収集され、輸入数三万点に及ぶといわれる。現在、大部分は各博物館に寄贈され、著名コレクターの名を冠したコレクションになっている。1903年、それらが兵庫県龍野市歴史文化資料館で一堂に会し、展覧会の図録「中国東北部の玩具」も刊行された。筆者はこの企画を高く評価するものだが、玩具の情報には大いに問題があった。

産地として図録の地図には十箇所が記入されているが、果して旧満州にかくも多数の産地があったのか？ 図録第72図～74図の黒い魚、犬、鳥の土笛の産地名は「呼蘭」「龍口」「營口」となっている。また92図にも同形の黒い玩具がある。ところがこれは全て前述した黒い玩具「泥泥狗」の土産用の安物（粗賃）で、吹き口が前方にあることも一致する。産地が河南省淮陽県であることは、同一の現代物を筆者自身が採取しているから間違いない。

最大の決め手は、民間美術復興運動開始時の東北部（旧満州）調査の必要に関する討議の結

論であろう。結果、調査はおこなわれなかった。東北部には戦乱を逃れて華北、山東の産地農民が一時移住したかもしれないが（戦後は帰郷）、民間玩具産地が無いというのが、中国の研究者の常識になっている。（よく探せば少しは有るかもしれないという人もいる）。理由は①寒冷地問題：農民が冬季副業に玩具を作るには寒すぎる。②文化問題：東北部は移民の地で、文化の歴史が短い等である。①についていえば、「呼蘭」はハルビンの北に位置し、冬は酷寒零下三十度以下にもなる。台所の竈の上の余熱で玩具の素焼きをつくるには、寒すぎる。結局、旧満州で採集された民間玩具の大部分は、中国本土からの輸入品ということになる。

では玩具にも記入され、図録にも明記されている「地名」は何を意味するのか？それは「産地」ではなく、「採取地」と解すべきものであろう。図録の解説にも、「同一玩具や同一の型からとった物の地名が異なり、混乱した」とあるが、それは産地と考えたから混乱したのであって、採集地なら、異なるのが当然ではないか。

では地名を「採集地」と明記せず、あたかも「産地」のようにしたのは誰で、何のためであったのか？ 旧満州（大連）から日本への玩具のルートを追っていくと、仲介者として須知善一氏が浮んでくる。彼は「満州郷土玩具、についてたくさんの記事を書いている。それ等によると、日本のコレクターへの直接送付及び日本の業者への卸売を独占しただけでなく、日本への全ての輸入に関わっている。また国策会社「満鉄」はじめ各方面に顔がきき、全土の採集者（在「満」邦人等）を手足の如く使っている。

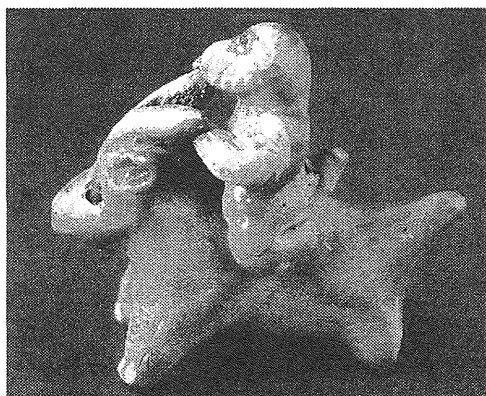
何故あたかも産地のように見せたかについても、須知氏の記事から推察できる。満鉄広報誌に載せた「満州郷土玩具案内（連京線の部）」には大要次のように言う。〴〵（満州の）郷土玩具はかつて漢民族にもたらされたものだが・・・長年満州の風土に培われ・・・近代文化の嵐にも

さらされない・素朴、純真なものとして残った。この文章に「国」という字を加えれば、彼の意図が明瞭になる。つまり「満州（国）に残った玩具は、満州（国）の物であって、中国のものではない」というのである。近現代史を思い出してみよう。須知氏が活躍した昭和初期、昭和6年（1931年）に満州事変勃発。これは日本関東軍が謀略で東北三省を占領したものである。蒋介石がこれを日本の侵略として国際連盟に提訴、リットン調査団がやって来る。日本は1932年、溥儀を皇帝とするカイライ政権「満州国」を建て、これに対抗した。当然「満州国の文化なるもの」を対外的に示さなければならなくなった。日本から多くの文化人が呼ばれ、「旧満州」の絵や小説を発表した。当時は郷土玩具ブームである。中国の民間玩具を「満州郷土玩具」と称し、「満人」の文化なるものになれば、国策にも合致し、須知氏の利益も保証さ

れたのである。須知氏には、原敬首相刺殺犯、中岡良一を部下の様に使っていた等、軍の強力なバックを持っていた例が幾つもあげられている（松原一枝著「幻の大連」）。

今や“満州郷土玩具”は各博物館に入り、国民の文化財となった。もはや須知氏のお墨付き（誤った情報）を有り難がる時代ではない。同じく戦時中に日本に来たものでも、南方信託統治領から来た資料は、世界の研究者に公開、利用されているのに、中国民間玩具の「伝世品（満州郷土玩具）」がそうならないのは、そこに「歴史認識」問題が介在し、日本人がふるい歴史観を捨てきれないためではなかろうか。

では、日本に残った「伝世品」に、どう対処すればよいのか？ 結局、龍野市の展覧会で計画されたような方式、中国の専門家を加えて整理し直すのがよいと思う。それも早い方がよい。高齢化が中国でも進んでいるから。



「背背猴」（おんぶ猿）、石、河南省方城

- ① “背背（べいべい）”は“輩輩（代々）”と同音なので、代々出世すると縁起を担ぐ。
- ② 大猿が小猿を背負う姿は「母子猿」。その寓意は「多子多福」。



「髯人・孫軍団」（馬のタテガミ人形・悟空軍団）、紙・土・剛毛・金属、北京

中国的動く玩具。銅製の皿を叩くと、ドラの音と共に人形が京劇の立ち回りをする。